

ある夫婦の真実の物語「もう一度あなたの嫁になりたい」

～「小さな会社で生まれた 心があたたまる12の奇跡」(明日香出版社刊)より～

最近、レストランウェディングは珍しいことではありません。しかしその予約が新婦からであり、その内容が「同じ男性との二度目の結婚式」であり、そのリクエストが、車いすが通れる通路の確保と新郎には看護師の付き添いが付くことであることは、あまりにないことです。しかしこの珍しい結婚披露宴が、レストランのスタッフに与えたギフトは、まさに「天使からの贈り物」でした。

この物語は、一本の電話から始まりました。

台湾の首都台北から西に、車で約一時間ほど走ったところに桃園があります。中国大陸から入植した客家人が、家の周りに桃の木を植えたことから「桃園」という名が付いた街です。ある朝、この街のレストラン「全家福桃園」、通称「カモ家族」に掛かってきた電話を取ったのは、スタッフの漂青(ユンチン)さんでした。

「こんにちは。4月下旬に結婚披露宴を予約したいのですが、まだ席はありますか？」

電話の相手は、何日も迷いながらやっと勇気を出して掛けてきた慧(フイ)さんでした。フイさんは、後日、応対に出たユンチンさんの親切な声に本当に助けられたといいます。そして安心して自分の希望が言えました。

「私にはお金がないの」そして…

「会場の通路を広く取りたいの」

ユンチンさんはやさしく答えました。

「大丈夫ですよ。ではメニューの詳細は、ご来店いただいて打ち合わせをしましょう」

二日後、フイさんが店に来ました。そして、その時初めてフイさんは、12年前に離婚した夫、士粟(シーサー)さんともう一度結婚をすること、でも彼は現在病気で車椅子であること、それも看護師が付き添わなければならないほど重病であることを打ち明けたのでした。

それを聞いたユンチンさんは驚きと疑問でいっぱいでした。“一体どういう事情が彼女にあったのだろうか？”

フイさんは、少しずつ事情を話してくれました。フイさんとフイさんの元夫、シーサーさんは中学時代からの幼なじみ。結婚の話が出た当初、「家柄が釣り合わない！」と、両方の親から大反対されました。でもそれを押し切って結婚に踏み切ったのです。フイさんが21歳の時でした。

しかし、5年たっても子供が出来ず、夫の家族からは非難の声が上がります。夫の母からは、ついに二号さんを入れるという話まで飛び出しました。さすがにこれは、夫が頑として受け入れませんでした。養

子をもらうことになりました。その間のごたごたに疲れた二人は、不本意ながら離婚という道を選択します。

「しかし、神様はいじわる・・・」

皮肉なことに、離婚後、ファイさんは自分が妊娠していることに気が付きます。三か月目でした。二人で訪れたクリニックで、シーソーさんは、赤ちゃんの心臓の音を聞き、そして滂沱の涙を流します。それを見てファイさんは、「私たちは離婚はしたけれど、一生シーソーさんと一緒に生きていく。絶対に離れない！」と決心をしたのです。その後、彼らは二人の可愛い娘にも恵まれて、更に力を合わせて幸せになろうとしていた矢先、シーソーさんを病が襲います。

「神様は二度もいじわるをするのね・・・」

心臓動脈剥離症。シーソーさんは、この病気が元で、軽症ながら植物人間になってしまいます。この二年間、ファイさんは低所得者向けの福利金と友人の助けによって生計を立て、娘達を育てながらシーソーさんの看病を続けてきました。その努力は並大抵のものではありません。

先生の診断によると、再度、手術の必要がありますが、その手術には命の危険もあると言われました。つまり家族の同意がいるということです。しかしシーソーさんの家族は、誰も同意書にサインをしません。「万が一の時、責任は取れない」というのです。ここであきらめたとしても致し方ない状況です。でも、ファイさんはあきらめませんでした。

「手術して治ってほしい」

では「私が責任を取ります」

でも、今の自分は家族じゃないから手術同意書にサインが出来ない…。ファイさんは決心します。

「私、彼の妻に戻りたい」

「そして彼のためにサインしたい」

「私はもう一度あなたの嫁になりたい」

ファイさんは、医者や議員、役所の人達、そして友人達の助けを得て、病室でついに二度目の結婚登録を実現させます。「経済的な余裕はないけれど、どうしてもこれまでお世話になった方達を宴会に招待して、感謝したい。私たちは皆さんの支えがあったからこそここまで乗り越えられた。その恩に対して私の感謝を伝えたい」

ファイさんのこの想いを聞き終わって、ユンチンさんはとても感動しました。と同時に、心の底から、「彼女たちに協力したい。私達カモ家族で、必ずファイさんの願いを叶えてあげたい。思い出に残る披露宴をしてあげたい」という熱い思いが湧きあがりました。

そして、このストーリーとユンチンさんの思いを聞いたフロアから厨房にいたるまでの、全スタッフが動

き出しました。ファイさんの「感謝と愛の披露宴」を成功させたい！フロアの担当者は皆で力を合わせて会場の飾りを作り、厨房では心のこもった料理の準備をします。後から気付いたことですが、この時、みんなの思いは完全に一つになっていました。

「ファイさんを応援したい、祝福したい、ファイさんと一緒に感謝と愛を伝えたい」

初めは自分たちがファイさんに喜び、感動を与えようとしていましたが、一番先に喜び、感動をもらったのは自分たちだったことに気付きます。

「与えることが受け取ること！」

この飲食業という仕事の意義を、ファイさんがカモ家族に教えてくれました。そして心を一つにして達成する喜びを、カモ家族は味わうことが出来たのでした。

披露宴の前日、何をどう準備したらいいのか分からず不安で、ファイさんは慌てていましたが、ユンチンさんの「私に任せて！」という一言で、再び救われたといいます。この時の安心感、感謝の気持ちは一生忘れられないものとなりました。とにかくユンチンさんにとって、ファイさんはもう自分の家族と同様でした。

4月25日の結婚披露宴の当日。

ファイさんは夫、シーサーさんに新郎服を着せて、自分は普段着の格好をしていました。胸に花が飾ってなければ、とても新婦だとは思えません。でも、可愛い娘たちと一緒に車椅子の夫を押して会場に入った時、ファイさんの顔にはいっぱい自信と幸せが満ち溢れていました。披露宴の中、ファイさんは立ち上がり、シーサーさんに向かって言いました。

「前回の結婚式では、あなたが私を守ってくれると言いました。今回は私の番よ。今度は、私があなたを守ります！」

この言葉を聞いたシーサーさんは、声にならない嗚咽をあげます。そして、その場にいた全員とカモ家族も……。

披露宴が終わる直前、スタッフたちは、真心を込めて書いた祝福のカードをファイさんに渡しました。彼らは知りませんでしたが、後日、このカードがどれ程、ファイさんの心の支えになったことでしょうか。

披露宴の二日後、シーサーさんは手術をしました。手術中、たった一人で廊下で待っていたファイさん。心細くて不安でしたが、この一枚のカードを握りしめ、「私は一人じゃない、孤独じゃない、こんなにも沢山の友達がいる」と心に言い聞かせていました。

手術後の長く続いているリハビリの中、カモ家族のスタッフたちは、電話でもファイさんを励ましました。

「ファイさん、みんなでお祈りしているからね」

「シーソーさんのリハビリに行く時、娘さんたちの面倒を見る人が居ないとき、いつでも大丈夫だから、店に連れて来なさい。私達が面倒を見るから。少なくともカモ家族は、絶対にお腹は空かさせないからね（笑）」

この言葉を聞いて、さすがに気丈なフィさんも涙を流しました。

「私は運がいい。カモ家族を選んで良かった」

「だって、カモ家族はただのレストランではなかった」

後日、フィさんの元に、カモ家族のモニカ副社長から、映像メッセージが届けられました。タイトルは、「カモ家族は、“あなたのもうひとつの家族”」。

「フィさん、私達カモ家族を選んでくれてありがとうございます。あなたが私たちを目覚めさせてくれました。私たちの仕事は、美食を通して人に愛を与える仕事、人を幸せにする仕事だということを教えてくれました。あなたの愛は、まさに『天使からの贈り物』でした。私たちは、今、胸を張ってこう言えます」

「飲食業は人格の産業、幸せを作る産業です！！」

カモは渡り鳥です。そのVの字に編隊を組んだ渡りは、不思議な力を発揮します。空気の抵抗を薄め、翼で後続が乗られる渦を巻き起こし、一羽で飛ぶよりもはるかに長い距離、大体1.7倍の距離を、群れになることで飛ぶことができます。そして先頭が疲れれば、入れ替わります。

カモではありませんが、人は一人では生きていくことは出来ません。家族を創るのも、愛のVの字飛行をするためです。疲れたとき、危機のときには支え合うのが、家族です。あなたも、フィさんのような生涯のパートナーを得てください。そのためには、まずあなたが愛を与えることです。

筆者は、こう思います。

「愛を与えれば、ありがとうが返ってくる」

「悲しみを与えれば、別れが返ってくる」

「苦しみを与えれば、憎しみが返ってくる」

そして職場の仲間も同様です。仕事は順調なときばかりではありません。それを乗り越える力が、職場のVの字パワーには秘められています。あなたも、思い切って、ユンチンさんのように先頭に立ってみませんか？大きな愛を与えたとき、あなたの愛の翼が巻き起こした渦が、きっと職場に奇跡を起こすことでしょう。

筆者は、こう願います。

「職場とは、一人の悲しみを10分の1にし、一人の喜びを10倍にするところ」

「職場とは、一度の縁から一生の情を育むところ」

「職場とは、まさに日本の縮図、職場が元気であれば日本は元気になる」